学生支援の現場から

◆呉工業高等専門学校
―豊かな心のエンジニアを目指して―

宇根　俊範
（学生主事　教授）

高専は概ね一五歳から二二歳という、人生において最も多感な年頃の学生で構成されている教育機関である。とりわけ大学と違って一五歳から一七、一八歳の未成年の学生を多く抱えていることにより、大学とは異なる様々な問題が生じ、またそのために懇切丁寧な学生指導が必要とされる。

高専生の現状を見るならば、青少年の精神的未発達から生じる精神不安、また人間関係の希薄化に伴う様々な問題への対応としての「心の教育」の必要性を痛感する。最も基本的なルール、マナーを守る倫理観・道徳心、社会人として生きていくための自主性・創造性・協調性・責任感、さらに先人の築いた文化・芸術を愛する豊かな心の育成が望まれる。

本高専では、五年前から学生たちが「心豊かなエンジニア」に育つよう、新しい学校行事として「文化行事」を創設し、一流芸術家らによる演劇や音楽を鑑賞する機会を学生に与えている。初年度は六人のボクシング世界チャンピオンを育てた名トレーナー、エディー・タウンゼントの生涯を描いた劇団イングの劇「エディー」を鑑賞し、学生に一つのことに打ち込む姿勢を学ばせることができた。二年目は特攻隊に現代の若者がタイムスリップする劇団青芸の「ウィンズ・オブ・ゴッド」を鑑賞し、このときは大和ミュージアムのご協力をいただき、出演者と大和ミュージアムにおいて本校学生・一般市民との座談会の場を設け、戦争について語り合う機会とした。三年目は世界的にも有名なヴァイオリニスト千住真理子さんを迎

ウィンズ・オブ・ゴッド座談会

え、ヴァイオリンリサイタルを催したが、千住真理子さんの名器ストラディバリウスの「デュランティー」を堪能した。日頃クラシック音楽にはあまり興味のない学生でさえ「ブラボー」と叫ぶなど大好評であった。また一般市民の参加希望の応募者も六〇〇名近くとなり、本校の地域貢献にも大変役立った。四年目はアメリカの陪審員制度を取り上げた映画でも有名な、東京芸術座の「12人の怒れる男たち」を鑑賞し、裁判員制度について学ぶ一助とした。五年目の今年は、桂米團治さん、桂吉弥さんら米朝一門による落語鑑賞をし、日本の古典芸能の一端に触れる機会とした。工学系の学校ではともすれば敬遠されがちな文化的な行事であるが、学生にもこの行事は好感をもって迎えられ、心配していた学生の鑑賞態度もほとんどの学生が真剣に鑑賞し、〝本物〟を鑑賞することで学生たちに豊かな心が育成されている（ちなみに、来年度は仲道郁代さんを迎えピアノリサイタルを予定している）。

千住真理子さんリサイタル

12人の怒れる男たち公演会場